

平成30年 6月11日現在

機関番号：15301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26870384

研究課題名(和文) 諸外国の音楽科カリキュラム及び実践にみる 声の発達観 についての調査研究

研究課題名(英文) Research for the view on development of children's voices in music curriculum and practice of foreign countries.

研究代表者

早川 倫子 (HAYAKAWA, Rinko)

岡山大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：60390241

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、諸外国の音楽科カリキュラム及び実践における《声の発達観》についての調査を目的としたものである。平成26年度は、フィンランド及びスウェーデンにおいて、平成27年度はカナダのブリティッシュコロンビア州において、音楽科カリキュラムの情報を収集するとともに、保育現場、教育現場の音楽活動の視察を行ない、分析及び考察を行なった。

特に、乳幼児期から児童期の発達に伴った「自然の声」を大切にしていること、音環境として声のトーンや声量に対する配慮を行っていること、多様な文化に関する表現や理解が求められる中で「個人的な声」を重視しているカリキュラムの内容や実践事例があったこと等が挙げられた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to investigate "the view on development of children's voices" in the music curriculum and practice of foreign countries. From 2014 to 2016, I gathered information on the music curriculum in Finland, Sweden and Canada's British Columbia region, visited musical activities at the childcare site and elementary school, and analyzed and considered about them.

In particular, it is important to value "natural voices" that are appropriate for children's development from early childhood to childhood, and they are considering tone and volume of voice as a sound environment. The content of the curriculum emphasizes expressions and understanding according to diverse cultures, and "personal voice".

研究分野：音楽教育学

キーワード：声の発達観 音楽科カリキュラム 歌唱 歌文化

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 教育現場の現状

近年、我が国の学校教育では、言語活動の充実やコミュニケーション能力や表現力の育成等が重視されている。その中心的な表現媒体となるのが「声」である。これまでの実践では、「声」の表現や発達の問題は、歌唱指導、発声指導、合唱指導といった一定の枠組みの中だけで捉えられてきた。さらに、「いい声」・「美しい声」という尺度で、クラス全体での声質の統一を目指した実践や、反対に「大きな声」・「元気な声」で歌うことに終始した実践などが多く、個々人の声の表現やその発達、コミュニケーションといった視点を踏まえて成り立っている歌唱活動等の実践は少ない。その結果、子どもたちは、「自分の声」という意識とは切り離された次元で声を出し、「自分の声」と向き合うことなしに表出している実態が多いことが認められる。

また、カリキュラム上においても、保育内容「表現」における乳幼児期の音声の発達や声の表現の発達から児童期（小学校音楽科）の発声指導・歌唱指導へのつながりが見られない現状がある。さらには、音楽科の教材として諸外国の音楽や我が国の伝統音楽の取り扱いが増えてきた。それに伴い、地声、頭声的発声、曲種に応じた発声など、求められる声の姿も変化し、教師側の実践的な課題も多く存在している。

### (2) 研究の動向と筆者の研究経過

我が国の声の発達に関する先行研究においても、前述した通り、乳幼児期の音声の発達について、または児童期以降の発声指導、歌唱指導、合唱指導を対象としたものがほとんどである。それらの研究には、乳幼児期から児童期への「声の発達」のつながりを意識した研究は少ない。

このような背景をもとに、筆者は志民・今川らとともに「保育者養成・教員養成・現職教育における『声を育てる』教育プログラムの構築（平成24年度科学研究費補助金・基盤研究(C):研究代表：志民）の共同研究に取り組んできた。ここでは、「声を育てる」という理念のもとに、育てる上で必要な知識や技術をどのように保育者・教員養成で身につけていくのか、そのプログラムを構築することを目的としている。

また、筆者はこれまでに「日米における幼小連携した音楽カリキュラムの比較研究」

（平成20年度科学研究費補助金・若手研究B 課題番号 20730554）を行い、米国のカリキュラムや授業実践には、「幼児期と児童期の区切りはなく人間成長をトータルで捉えた教育観、音楽観の存在が、実際の音楽教師の指導観や授業に反映されていたこと」、「様々な音楽活動においては、身体における音楽的概念の獲得と重視していること」などの実態を明らかにしてきた。これらの研究経過を踏まえて、本研究では、特に幼児期から児童期における《声の発達観》に着目して、

諸外国のカリキュラムや授業実践を調査し、その実態を明らかにしたいと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究では、《声の発達観》に着目して、諸外国の音楽科カリキュラムや音楽授業、歌唱活動の実践を調査し、その実態を明らかにすることを目的とする。

特に、幼児期から児童期にかけての声の発達をどのように捉え、それが音楽科カリキュラムの内容にどのように反映されているのか、また幼児教育現場、保育現場、小学校等では声を使った表現活動や歌唱活動がどのように行われているのかを調査・比較し、その特徴について明らかにすることを目的とした。

《声の発達観》とは、子どもの声の発達をどのように捉え、それをいかに教育上に関連づけているか、である。カリキュラムに反映されている場合もあれば、個々人の教師の力量に関わっている部分もあるだろう。本研究では、その両側面からアプローチする。

## 3. 研究の方法

本研究では、以下の点から研究を進めた。

(1) 我が国における《声の発達観》に関する知見の整理：我が国における《声の発達観》について、文献や資料、先行研究を分析することによって、歴史的変遷を辿るとともに、それぞれの時代によって《声の発達観》がどのように変わってきたのか、その知見を整理する。

(2) 我が国における「声の表現活動」や「歌唱活動」の実践と実践者の《声の発達観》に関する実態調査と課題の整理：保育・教育現場での声の表現活動や歌唱活動の実践について観察調査し、課題を整理する。

(3) 諸外国における音楽科カリキュラムの分析：現地調査の対象となる国（州・市など）の音楽科カリキュラムの情報を収集し、分析を行う。

(4) 諸外国における「声の表現活動」や「歌唱活動」の実践と実践者の《声の発達観》に関する実態調査：諸外国における保育・教育現場での声の表現活動や歌唱活動の実践について観察調査する。さらに、実践者へのインタビューを通して《声の発達観》に関する考察を行う。（今回は、フィンランド、スウェーデン、カナダを対象とした）

(5) 研究のまとめ：収集したカリキュラムの情報、視察及びインタビューの内容を分析し、《声の発達観》に関する特徴を導き出す。

## 4. 研究成果

(1) 諸外国の現地調査の概要

①平成26年度スウェーデン及びフィンランドの視察について

日程：平成27年3月16日～3月25日

主な訪問先：スウェーデン Taby 地区音楽学校、Timmermansgarden 保育園、Ytterbyskolan

小学校、音楽保育園、及びフィンランドユヴァスキュラ市 Kortepohjan 保育園、ムスカリ（子ども向け音楽教室）、ユヴァスキュラ大学教育実習校初等部及び中等部、ヘルシンキ市内音楽教育機関ほか

②平成 27 年度カナダブリティッシュコロンビア州の視察について

日程：平成 28 年 3 月 4 日～3 月 15 日

主な訪問先：University Hills 小学校、McKechnie 小学校、Renfrew 小学校、Douglas Park Community Centre(Singing class)ほか

(2) 実践の視察から得られた歌唱活動の際の声の傾向

①スウェーデン及びフィンランドの視察より

スウェーデンおよびフィンランドの訪問先全体を通して、子どもの歌声の傾向として、いわゆる「自然の声」であるという実態が把握できた。インタビューを行った音楽教師のほとんどからも、「どのような声で歌わせたいか」という質問については、「子どもの自然の声を大切にしている」という回答が得られた。また子どもの歌う声量についても「大きな声は求めていない」という考え方が多く、表現の一つとしてダイナミクスは必要だが、「大きな声で・元気な声で」歌おうと指導する日本の歌唱指導によく見られる指導言は、視察中どの教育現場でも一度も使われていることは確認されなかった。また、子どもの声だけでなく、授業中や音楽活動の際の教師の声にも特徴があった。それは、大きな声を出したり、声を張り上げて話したり歌ったりしていないという点である。このことは乳幼児に対しても、児童に対しても同じであり、声を大切に・音を大切に環境構成がなされているということが確認された。

また、「自然の声」を生かしながら、発音や巻き舌など声そのもののコントロールの方法について習得していくことも重視されていた。「自分の声で何ができるかということを試すことが大切だ」という教師の発言からも確認できた。

②カナダブリティッシュコロンビア州の視察より

カナダでは、低学年の音楽の授業を中心に参観したが、全体的な傾向としてどの学校のどのクラスも、北欧の視察時と同様に子どもの歌声（発声）は「自然な発声」であることが実態として確認できた。一方で、教師の発声は、基本的に頭声発声と呼ばれている発声法が中心で（参観した小学校 3 校のうち、2 校は女性教師、1 校が男性教師）、曲種によっては低い音程の曲に表声も使用しながら歌っている実態も読み取れた。また、教師と児童の声のやり取りからは、児童が教師の声をよく聴いており、意識的にせよ無意識的にせよ教師の発声する声そのものの模倣によって、声質や発声の仕方を身につけているのではないかということも考えられた。

(3) 歌唱活動に関するその他の特徴

①スウェーデン及びフィンランドの視察より

スウェーデンの公立小学校の音楽クラスを視察した際に、教師へのインタビューから、授業で歌うこと（合唱すること）は、歌を上手に歌えるようにする、合唱曲を完成させるという方向ではなく、生涯にわたって「生活の中、人生の中で歌い続けること」「合唱文化を大切にすること」を伝えていくことが必要だとの回答があった。すなわち「歌う文化をつくる」ことが重視されていることが認められた。また、自国の音楽を大切に、それらを歌う活動を多く取り入れている傾向も見られた。

②カナダブリティッシュコロンビア州の視察より

ブリティッシュコロンビア州の公立小学校 A では、声のピッチを合わせることを重視しており、特に歌を通して音程感覚を育てようとしていることが把握できた。教師へのインタビューから、教師がコダーイメソッドを勉強し導入していることがわかり、それが上記の学習内容に反映されていることが認められた。

また小学校 B では、発声の際に呼吸を大切にしていることが認められた。インタビューにおいても、歌唱指導で大切なことは何かという質問に対して、教師は「息をコントロールすることを身につけさせることが重要である」と述べていることから明らかである。

さらに、小学校 C は、様々な国と民族の児童が在籍している背景から、いろいろな種類の楽曲が選曲されていた。単に歌うだけでなく、その歌の社会的・文化的背景を理解することも学習内容に取り入れられており、歌のレパートリーを増やすことと多文化社会に対応する力を育てることへ向けられていることが読み取れた。

(4) カリキュラム等における歌唱、声に関する特徴と実際（一部抜粋）

①フィンランドユヴァスキュラ市ムスカリの内容について

「ムスカリ」とは、ユヴァスキュラ市の子どもの音楽教室を指す。対象は妊婦さん（胎児期）から乳幼児期、そして児童期の子どもたちと親となっている。それぞれの発達段階に合わせた音楽活動の内容と方法が設定されているが、特に乳児のクラスでは親子の相互作用を重視している。そこでは、安心感を基礎に活動を進めていくことが示されており、実際の観察でも音環境としての声のトーンや声量の配慮を行っている点、母親が赤ちゃんに、先生が母親と赤ちゃんに優しく語りかけたり歌いかけたりする声のやり取り（声によるコミュニケーション）が認められた。また、幼児のクラスでは、遊びを通じたアクティブな内容が設定されており、音楽性や想像力を育てるために、童謡を中心とした歌唱が行われている点もカリキュラム上の特徴

として見出された。

②カナダブリティッシュコロンビア州の音楽科カリキュラムの内容について

ブリティッシュコロンビア州のカリキュラムは、2016年に第9学年までの改訂版が出され、第10学年以上については2017年に草案が出されている。これまでの旧カリキュラムでは、何を教えるかが細かく決められていて、各学年・教科ごとにすべてガイドラインがあったが、今回の改定でコンセプトベース（ビッグアイデアと呼んでいるコンセプトをもとにしたもの）となった。すなわち、構成として、4つのビッグアイデアに6つのコンピテンシーを柱とし、教師の力量によって学習内容や方法を決定する。また、改定にあたっては、その方針として個々のニーズに応じた学習の展開や多民族を尊重した学習内容への転換が求められている。

《声の発達感》の視点からは、第9学年までのカリキュラムにおいてその特徴は認められなかったが、多様な文化に即した表現や理解が求められている点が関連事項として挙げられた。また第10学年以上の内容には、合唱において文化的・社会的文脈からの「個人の声」を重視することが示されていた。前述の通り、実際の授業観察からも、多文化的な側面から曲を選び、文化的な背景の理解とともに歌うことを実践している事例もあったことから、個々の民族や文化を重視することは個人の歌声も重視することへとつながっていると考えられる。

(5) まとめ

以上のことから、現地調査とカリキュラムの分析を通して、《声の発達観》に関連して、以下の特徴が明らかとなった。

- ① 教師は、子どもの声（発声）を指導するという観点ではなく、その発達段階ごとに持っている「自然の声」を大切にしているということ。
- ② 統一的（画一的）な発声よりも、自分の声をコントロールする力を育てることへ向けられていること。
- ③ 歌うことは、その曲を上手に歌えるようにすることではなく、その曲の文化的背景を理解したり、歌詞の表す情景等の想像的な世界を味わったりする方向にあること。
- ④ 上手に歌えることよりも、歌う文化を築くことを大切にしているということ
- ⑤ 大きな声や張り上げたような声を画一的に出すことはなく、音環境としての声、コミュニケーションとしての声を大切にしていること

また、これらの調査内容と《声の発達観》に関わる特徴を踏まえ、子どもの歌文化と声について、わが国の小学校を対象にした歌文化の調査、声楽家からの専門的知識の提供、さらに「みんなで歌おう音楽会」を開催した。

今後の課題としては、今回調査・分析した範囲は限られるため、さらに他の国や地域の《声の発達感》について調査を継続したいと考えている。また、以上の調査結果は、研究論文の形で公表出来ていないため、今後進めていきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔その他〕

(1) ホームページ等

<http://edu.okayama-u.ac.jp/~ongaku/hayakawa/index.html>

(2) 「みんなで歌おう音楽会」冊子（基礎研究とその応用）

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

早川 倫子 (HAYAKAWA Rinko)

岡山大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：69390241

(2) 研究協力者

多勢 波奈 (UTTERSTOROM Hanna)

スウェーデン調査関係

小林 文菜 (PALANDER Ayana)

フィンランド調査関係

徳力 志保 (TOKURIKI Shiho)

カナダ調査関係